

久留米大学

比較文化研究所年報

第4号

2010

比較文化研究所年報 第4号 (2010年度)

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告	
1. 研究部会報告	
(1) 欧州研究部会	6
(2) 外国語教育研究部会	7
(3) 健康文化研究部会	8
(4) 地域博物館研究部会	11
(5) 福祉コミュニティ研究部会	16
(6) 文化財保存科学研究部会	18
(7) 民事法研究部会	20
(8) 地域社会・文化・経済研究部会	20
(9) 地域精神保健福祉部会	23
2. 筑後川流域圏の総合研究	26
3. 社会連携研究「健康生きがいのあるまちづくり」	27
4. 研究員発表会	28
5. 日誌（運営会議、研究所会議等）	30
施設・設備	31



は じ め に

比較文化研究所長 浅 見 良 露

2008年度に比較文化研究所年報を発刊して、今年度で第4号になります。毎年前年度の比較文化研究所の活動状況を報告し、また、多くの方々に比較文化研究所を知っていただく目的で発刊しております。

比較文化研究所は、1987年に設立以来、2007年に20周年を迎えました。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学院比較文化研究科の研究機能を受け持ち、所員もまた、専任所員および大学院比較文化研究科後期博士課程教員に限られていましたが、近年は、大学での研究成果の地域や社会への還元が求められる中、2006年度に「筑後川流域圏の総合的研究」を、2007年度に、文部科学省私学振興高度化事業である社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究～健康と生きがいのあるまちづくりを中心に～」をスタートさせ、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図っております。

第4号は、2010年度の活動状況を中心に掲載しております。本年報を通じて、比較文化研究所と地域や社会との交流・連携がさらに広がることを期待します。

2012年 3 月

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」(比較文化研究所規程)であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院博士課程比較文化研究科後期課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長(当時、現在の比較文化研究科長にあたる)が兼任しておりました。

その後2001年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も、大学院担当教員を中心に、その他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

まず、2006年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究(大川研究)」を開始しました。2006年度～2007年度においては、大川地域における研究が行われ、2008年にその第1回の研究報告書「大川地域研究」を発刊しました。また同時に、大川市における報告会も開催いたしました。2008年度～2009年度においては、研究対象地域を旧三潴郡に移して、「筑後川流域圏の総合研究(三潴研究)」さらに研究を進め、2010年に第2回の研究報告書「三潴地域研究」を発行いたしました。そしてさらに、2010年度からは、旧久留米市を中心とした地域の研究に着手しております。

また、文部科学省が進めている私立大学学術研究高度化推進事業のなかで社会連携研究推進事業に、比較文化研究所は大型研究プロジェクト「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究—健康生きがいのあるまちづくりを中心に—」(代表保坂恵美子、研究分担者15名、研究期間5年間)の申請が認められ、2007年度からスタートしました。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには、久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。平成22年度においては、次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長	浅見良露(経済学部教授と兼任)
専任所員	大西 良(講師)
客員教授	鈴木 廣
	森 醇一郎
所 員	77名(専任所員2名(上記)、 客員教授2名2(上記)、

大学院比較文化研究科後期博士課程の教員32名、
大学院心理学研究科後期博士課程の教員 6 名、
任意に加入する助教以上の教員35名)

特別研究員 2 名

研究部会研究協力者 4 名(文化財保存科学研究部会 4 名)

研究員 25名

専任所員は、講師以上の教員となり、任期制をとっております。

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2010年度における研究部会は以下の通りです。また、各研究部会の研究活動を次項以下に示します。

- 1) 欧州研究部会 (部会長 児玉昌己教授)
- 2) 健康文化研究部会 (部会長 満園良一教授)
- 3) 外国語教育研究部会 (部会長 李 偉准教授)
- 4) 福祉コミュニティ研究部会 (部会長 保坂恵美子教授)
- 5) 民事法研究部会 (部会長 石川真人教授)
- 6) 文化財保存科学研究部会 (部会長 狩野啓子教授)
- 7) 地域博物館研究部会 (部会長 吉田洋一准教授)
- 8) 地域社会・文化・経済研究部会 (部会長 大矢野栄次教授)
- 9) 地域精神保健福祉研究部会 (部会長 辻丸秀策教授)

研究員は、後期博士課程を修了した者が、その後も研究を続け、博士の学位論文の作成を目指すという者等が含まれます。2010年度は、25名の研究員が在籍しており、指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

議 決

比較文化研究所における議決組織として、主として次の2つの議決組織があります。

運営会議：所長、専任所員、研究部会長、所員の代表からなる組織で、2010年度は合わせて15名の運営委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な議決機関となります。

研究所会議：所長、専任所員、所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する決定を行います。

また、学部などとの必要な連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、学部長、専任所員の教授を含む所員の教授5名によって組織されています。

おもな活動

比較文化研究所の活動は、研究部会の活動および研究所の活動に分かれます。

本年度の活動については次項以下を参照ください。

研究成果の公表

『比較文化研究』

研究所の紀要として『比較文化研究所紀要』第 1 輯を1987年に発行しましたが、その後1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と紀要名を改称しています。また、平成21年度より、査読制をとり、また、年 1 回の発行となっております。第45輯の目次は以下の通りです。

『比較文化研究』第45輯(2011年 3 月発行)

論 文 市川鄧康「「ドイツ難民」とホロコースト 危険な狂信的國家主義」 pp.1-14

研究ノート 大西 良「スクールソーシャルワーカーによる学校現場での緊急支援活動について」
pp.15-19

宮原信孝「核問題を巡る第 4 次国連制裁後のイラン情勢についての研究ノート」
pp.21-42

資 料 米川和雄 他「Emotional Intelligence Scale(EQS)の併存的妥当性の検証」 pp.43-50
吉田洋一・中野正裕「幕末佐賀蘭方医・松尾徳明一代記について」 pp.(1)-(36)

各研究部会等の研究成果の公表

また、各研究部会などにおいても出版物をはじめとする研究成果の発表が行われておりますが、これらの成果については、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

さらに、研究員については、平成18年度から、年度末の 2 月に、研究員研究発表会を行い、その年度における研究成果の発表が行われています。

『比較文化研究所年報』の刊行(本冊)

比較文化研究所における 1 年間の研究成果の報告および比較文化研究所の学外への周知を目的に、2008年度(2007年度の報告)より刊行を開始しました。

筑後川流域圏の総合研究(久留米研究)

久留米大学は、筑後川流域圏の中央部に位置しますが、久留米大学の位置する筑後川流域圏を研究し、さらにその成果を地域に還元しようとするものです。本研究は2006年度より開始しています。現在のところ、下流域から上流域へ 2 年単位で研究を進めており、2006～2007年度においては、筑後川河口付近の大川市を中心とした地域を対象とし、2007年度末に『大川地域研究』を刊行しました。2008～2009年度は、研究対象地域を、筑後川を少しさかのぼった旧三潴郡(久留米市三潴町、久留米市城島町、三潴郡大木町)を中心とした地域を対象に、研究を進め、2009年度末に、その成果をとりまとめ、報告書『三潴地域研究』を刊行しました。そして、2010年度からは、2011年度までの予定で、久留米市を対象地域として、研究を進めています。その研究成果は、2011年度末に刊行の予定です。

(詳細は別項参照)。

社会連携研究「筑後川流域圏における産学官民協働と地域コミュニティ開発に関する研究
～健康生きがいのあるまちづくりを中心に～」

大学と地域社会との連携を目的として、2007年度より、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業としてスタート、2010年度においては、「おこそう！御井ルネッサンス」をテーマに、地域の教育、文化、まちづくり団体との交流研究を行い、地元御井町との協働によるまちづくりをテーマとした“ゆにばひろば”を実施しました(詳細は別項参照)。

活動報告

1. 研究部会報告

(1) 欧州研究部会

比較文化研究所欧州研究部会では、講演会活動に重点においた活動を行っている。2010年度も同様に福岡県民に広く開かれた講演会を東京、京都から欧州と米国の政治に詳しい以下の要領で3名の講演者を招き、久留米大学福岡サテライト（福岡市中央区天神 1-1-1 アクロス福岡 東オフィス 5F）において実施した。以下がその概要である。

第1回

講演者：八十田 博人（共立女子大学国際学部専任講師）

演 題：『イタリアと EU』

略 歴：2000年3月 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程単位取得満期退学

講演者の主な業績：

『帝国の長い影 20世紀国際秩序の変容』（共著）ミネルヴァ書房 2010年10月

『原典・ヨーロッパ統合史』（共著）名古屋大学出版会 2008年11月

『EU スタディーズ 3 国家・地域・民族』（共著）勁草書房 2007年9月

第2回

講演者：島村 力（拓殖大学海外事情研究所客員教授）

演 題：『アメリカから見たヨーロッパ～第二次大戦後の米政権の見方を中心に』

略 歴：1957年、東京大学教養学部卒業、中央公論社入社 1970年～1973年、『中央公論』編集長

1975年～1977年、「タイム・ライフ」社、特別企画、編集長 1985年～2001年、京都外国語

大学、早稲田大学非常勤講師 1986年～2001年、拓殖大学海外事情研究所教授、2001年～現

在 現職

講演者の主な業績：

『アメリカ人も知らないアメリカの恥部』KK ベストセラーズ『英語で読む日本国憲法』グラフ社

『イラク戦争の衝撃』（共著）勉強出版 他著作、論文多数

第 3 回

講演者：鷺江 義勝（同志社大学法学部教授）

演 題：『リスボン条約による EU の改革』

略 歴：1990年 3 月 同志社大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程後期課程

講演者の主な業績：

『リスボン条約による欧州統合の新展開』（編著）ミネルヴァ書房、平成2009年 8 月

『国際関係と国際組織』（共編著）成文堂、平成2003年 6 月

『EU 欧州統合の現在』（共著）創元社、平成2005年 4 月

3 回ともそれぞれの講演者の専門領域を背景に、八十田講師はイタリアの最新情勢を語っていただき、島村先生には最新米国事情を、そして鷺江教授には EU の最新条約であるリスボン条約の翻訳者として、その制度設計を語っていただき、大いに知見を新たにしました。

（文責 児玉 昌己）

(2) 外国語教育研究部会

外国語教育研究部会は、外国語教育のバックグラウンドの人間教育をモットに、毎年外国語語学、文学と教育のみならず、その周辺分野の異文化コミュニケーション、異文化理解、人間関係など幅広い課題を取り上げ、専門的な研究者を講師に、教員及び地域住民を対象にした講演会を実施している。

2010年度は、多言語問題バンクの構築に関する講演会を実施した。講師として同志社大学言語文化教育研究センター所長油谷幸利教授にお願いした。参加者は本学教員及び非常勤講師計21名であった。

演 題：多言語問題バンクの可能性について

日 時：平成22年 9 月25日 土曜日 10：00～12：00

場 所：久留米大学御井キャンパス メディアセンター 6F 第 2 LL 教室

講演者：油谷 幸利 教授（同志社大学言語文化教育研究センター所長）

専門分野：韓国語統辞論・語彙論、日韓対照言語学、韓国語情報処理

編 著 書：『朝鮮語辞典』（小学館）、『小学館日韓辞典』（小学館）、

『日韓対照言語学入門』（白帝社）、『総合韓国語 1-4』（白帝社）など

講演内容：

朝鮮語教育研究会情報処理分科会では、2010年 1 月より朝鮮語教育研究会ホームページの会員コーナーに、自学自習用の CALL 教材の資料として問題バンクを設置し、会員がこれに投稿する形でデータを蓄積してきた。

問題バンクは大きく投稿部門と出題部門に分かれている。投稿部門では、出題フォーマットに基づいて投稿された問題と選択肢をデータベースに蓄積する。出題部門では、データベースからランダムに問題を抽出して利用者に提示し、利用者の入力に基づいて正誤判定と一時的な成績処理を行う。

2010 年 5 月現在における問題バンクの種類は以下の 2 分野11種類であり、この内、問題数が100を超

えた 2, 8, 11 を公開している。

四択問題分野：1. ハングルの読み方、2. 地名・人名のハングル表記、3. 発音、4. 基本的な助詞と語尾、5. 類義語、6. 対義語、7. 対話文の完成、8. 連語、9. 漢字音

記述問題分野：10. 語彙体系、11. 作文

本発表では、韓国語用に開発した問題バンクを、他の言語にも応用する可能性を探りたい。

(文責 李 偉)

(3) 健康文化部会

《活動報告》「医療文化史からみた筑後地域における医学史の比較研究」

平成22年度の健康文化部会は、「筑後地域の医療文化史」を扱うべく、その方向性とシステムを模索するために、昨年に引き続いて大学付置の博物館、資料館などを中心に様々な資料収集と視察を実施した。大学が持つ資料、資源は地域などに、どのように一般公開されているか、大きなテーマである。そのテーマのもとに、訪問した施設と概要などは、以下に列記した通りである。

1. 4月16日(金)：富山大学民族薬物資料館&医学図書館

拡張した上で新装なった民族薬物資料館(2009年度一杯でリニューアル)は、内装が未整理で基本的には昨年度の訪問時と変わらなかった。基本的に、図書館で資料収集に努めたが、再開館を待って、改めて訪れたい。

2. 4月16日(金)：富山市科学博物館

富山における(立山連山の)自然や(ダイヤモンドダスト、富山湾の特徴と蜃気楼など)地域における現象について、様々な角度から面白さを伝える工夫が満載であった。

3. 4月17日(土)：廣貫堂資料館

置き薬で発祥の地となった医療文化史が核に据えられると同時に、全国へ情報発信された過程までを展開していた。

4. 4月29日(木)：東京芸術大学大学美術館

東京芸術大学大学美術館が付置の博物館、資料館として機能しており、所有する作品群の一般公開を有料のもとに行っていた。芸大卒業生の作品展示なども定期的の実施しているらしく、大学が卒業生も含めた情報発信地になっている。

5. 4月29日(木)：国立博物館黒田記念室

本記念室は黒田清輝の顕彰館であり、東京国立博物館の分室でもある。美術研究所であった建物を含めて一般公開対象で、絵画の科学的分析も行っていた。前述の東京芸術大学大学美術館における彫像とともに、「からだ」の理解あるいは把握は、美術にとっても不可欠であることを窺わせていた。

6. 4月30日(金)：東京国立博物館

改築中の東洋館以外、特別展と、常設展を全て視察した。

7. 4月30日(金)：国立科学博物館

「大哺乳類展」の開催と同時に、常設展として考えられる「日本の生物多様性とその保全」との組

み合わせで、国連制定の「国際生物多様年」を意識した内容であった。「大哺乳類展」は様々な哺乳類の骨格標本に加えて、動物写真家の人物描写とともに工夫された展示である。

8. 5月6日(木)：長崎県立長崎歴史文化博物館

貿易における薬種が医療誌として回問見られ、江戸中期にはヨーロッパからトドネウスの「草木誌」も入っていたのが目を引いた。また、江戸末期における動乱時代に蘭方医として存在した蘭学通詞、出島外科医あるいは商館医との関係が医療文化史を表している。

9. 5月6日(木)：長崎市立シーボルト記念館

長崎におけるシーボルトの足跡がコンパクトに纏めてあり、その時の日本人との交流を軸に時系列で見やすい。また、外科術で実際に使用した道具など展示は、日本での西洋医学の幕開けを彷彿させる。

10. 6月24日(木)：岩手大学ミュージアム本館、農学部獣医学科標本室&農学部附属農業教育資料館

岩手大学ミュージアムは、情報メディアセンターの3部門の1つとして存在している。大学に求められる研究教育の成果公開であるが、「岩手大学まるごとミュージアム」として学内の「植物園」「自然観察園」とともに5施設から構成されていた。本館は旧制盛岡高等農林学校の図書室として建築されたもので、主題で4つに分けられた本館の展示は大学の歴史と4学部の研究成果を纏めてあった。また、農学部獣医学科標本室は「動物の病気標本室」として公開された日本最大の大小動物における病理標本で、日本最古の標本から牛、羊の単眼症、双頭症の標本など豊富な種類は圧巻である。ただ、その膨大且つ豊富な病理標本にしては、建物の耐震構造や劣化が惜しまれる。さらに、農学部附属農業教育資料館は旧制盛岡高等農林学校の本館であり、重要文化財となっていた。展示は、従来の農学教育・研究における資料と、旧制盛岡高等農林学校に在籍していた宮沢賢治の関係資料について在学分を中心に公開したもので、往時を偲ばせる工夫が感じられた。

11. 7月25日(日)：石川県立歴史博物館

明治時代の歴史を彷彿させる石川県立歴史博物館は、古代から時系列的な展示を踏襲しつつも、近・現代史における資料、および「朱鷺」を始め(日本海側の)自然との関連史の豊富さに特徴を感じた。また、石川県における医学・医療の歴史は、他の地区と同様に加賀藩の幕末から医学館として繋がり、明治時代の洋学化を経て金沢医科大学に続くことになる。その中に現れた人体模型ならぬキンストレーキは、極めて珍しい。

12. 7月26日(月)：金沢大学資料館

金沢大学資料館は、金沢大学の発祥と移転を軸にした資料の展示を、図書館に併設したなかでコンパクトに行っていた。また、収蔵品は文化史、自然史、科学技術史、および大学史に大別されており、当時の医療機器の展示金沢地区の開業医との関係も僅かながら垣間見ることが出来る。

13. 7月27日(火)：石川県立自然史資料館

企画展として様々な動物の「ふだんは見えない骨の世界」が開催中であり、自然史資料の収集・保管している展示に併せたスペースは教育文化の普及を意識させていた。

14. 10月23日(土)：平城京歴史館

平城京遷都1300年の今年、平城京の再現を試みた広大な地区自体が博物館的な存在感を有していた。その地区の端にある平城京歴史館は映像を中心にしたもので、一次的な資料に基礎を置いていない。なお、春日大社の施薬院についても、確認出来るものなかった。

15. 2 月 8 日 (火)：北九州市立いのちのたび博物館【自然史・歴史博物館】

北九州市の各地で発掘された豊富な化石資料と広大な自然を基礎に置き、時系列的に展示してあった。工業都市の印象が強い北九州ながら、今に至る干潟の存在などは公害などとの格闘を感じさせる展示である。また、1 階の様々な骨格展示が 2 階、3 階からも見学できるようになっており、立体的な鑑賞スペースに工夫が見て取れる。また、歴史博物館も工業化に伴う近代のブースは、具体的な展示でタイム・スリップした感で面白い。

16. 2 月 8 日 (火)：北九州市立環境ミュージアム

隣地の、いのちのたび博物館が豊富な自然を彷彿させるものと表裏一体を成す。日本の近代化に欠かせなかった工業化は公害を生んだが、その負の部分から立ち直る北九州の歴史過程も分かり易い。

17. 2 月 11 日 (金)：鹿児島・維新ふるさと館

鹿児島が果たした役割について明治維新に至る歴史、明治における歴史に焦点を当てた歴史資料館である。NHK 大河ドラマにおける名場面をピン・ポイントで取り上げながら、その背景を教育制度などで説明するなど工夫が随所に見られた。

18. 2 月 12 日 (土)：鹿児島歴史資料センター黎明館

美術や民芸なども含んでおり、古代から近、現代に至る南九州地区の政治・社会史に焦点を当てた歴史資料館として展示は幅広い。今に至る近代博物館の創始者(町田久成)が、鹿児島出身だった。

19. 2 月 18 日 (金)：東海大学海洋科学博物館&自然史博物館

1970年に創設された大学付属の水族館を中心にした博物館で、長い歴史を有することに加え、大学付属の博物館としての規模も大きい。世界でも有数の深海を誇る駿河湾における生き物を扱うと同時に、その生き物を機械で再現しようとしたメクアリウム、海の自然、生態も含めた海洋に関する総合的な博物館になる。本館が地域における自然教育、情操教育を担っており、親子連れの幼稚園児も多く、当日も賑やかであった。隣接する自然史博物館は恐竜と恐竜を取り巻く環境を追ったもので、地域における教育文化の一端を伺えた。

20. 2 月 19 日 (土)：南山大学人類学博物館

南山大学ゆかりの発掘コレクションが中心であり、縄文、弥生、そして古墳時代に至る土器を順次「コの字」に並べた第 1 展示室は、分かりやすい。第 2 展示室は昭和時代の生活資料の展示で、北九州市立いのちのたび博物館【歴史博物館】にあった工業化に伴う近代のブースと同様の趣向である。民族資料展示の第 3 展示室は、工事中につき閉鎖されていた。なお、博物館主催のシンポジウムが充実しており、紀要など報告書は有料であった。

21. 2 月 19 日 (土)：名古屋大学博物館

2000年度に創設された博物館は、過去の機器(入口に電子顕微鏡)や発掘による展示物など大学の歴史に併行させた展示であった。社会に開かれた名古屋大学の窓口として研究成果、教育との関わりが垣間見られる企画展、特別展などは報告書にも詳しい。また、2 階に名古屋大学に関わったノーベル賞受賞者の 4 人の詳細な展示があった。

22. 2 月 27 日 (日)：兵庫県立ヒトと自然の博物館

地球における生命の誕生から、人類誕生までを多くの化石標本で辿ると同時に、森林の多様性は、木の材質など詳細な特徴を五感に訴えるような展示であった。また、化石の展示に留まらず、『化石

工房』としてクリーニング作業丸ごとの展示は、博物館の日常を知らしめる上で面白い。博物館に寄贈された個人コレクション展示も多く、昆虫に関しては圧巻である。加えて、博物館に関わる研究員（あるいは学芸員）が40人弱と多いことは面白く分かりやすく、且つ個性的な展示になっているものと思われる。

上記の視察、調査に加え、昨年度に予定しながら実施出来ず、平成22年度開催の課題となっていた第1回医療文化講演会は、以下の要領で実施した。

日 時：平成22年12月18日（土）

講 師：ヴォルフガング・ミヒェル（九州大学大学院言語文化研究院長）

演 題：外科医カスパルと日本における西洋医学の受容について

（文責：満園 良一）

（4）地域博物館研究部会

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と共に協力・連携し、歴史的環境を保持し地域文化を継承していくことを目的とする。

運営（研究）計画

①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察

②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）

③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

・2010年度の活動報告の一例として、ニュースレター（vol. 2）を発行した。

地域博物館研究部会ニュースレター CONTECTS

津軽ジョンガラと太宰治 大矢野 栄次
レポート

博物館学芸員養成課程とリンクした大学博物館 — 札幌学院大学考古学資料展示室 —

..... 堂前 亮平

博物館資料保存論対策講座受講レポート 吉田 洋一

寄稿 九州の図書館・博物館②（長崎歴史文化博物館） 平岡 隆二

・医療文化講演会の共催（12月18日）

以下、ニュースレター及び講演会チラシを転載致します。

（文責 吉田 洋一）

NEWSLETTER 2011 Vol.2

『津軽ジョンガラと太宰治』

経済学部教授 大矢野 栄次

一、津軽三味線の始祖仁太坊

津軽地方の五所川原市金木地区に「津軽三味線会館*1」（ジョンガラ会館）がある。津軽三味線の歴史、民謡、郷土芸能等を紹介する展示室があり、舞台演奏ができる多目的ホールや野外ステージがある。多目的ホールでは毎日、津軽三味線のライブステージと津軽三味線物語、観光ビデオシアターが上映されている。

津軽三味線とは、津軽ジョンガラのための三味線である。三味線の太竿を使い、その調子は、天草ハイヤ節の流れであり、バックに踊りが付き物である。踊りのかたちは、九州の御神楽であり、佐賀の浮立（行列浮立・太鼓浮立・踊り浮立・面浮立）であり、福岡の風流である。そして、鹿児島・宮崎の初午と調子や振り付けが似ているのである。九州から伝わった囃子と踊りが、やがて、加瀬の奴踊り*2や金木のさなぶり*3、「お山参詣」*4となったのであろう。

この五所川原市金木地区（旧金木町）は、津軽三味線発祥の地である。なぜなら津軽ジョンガラの元祖といわれる「神原の仁太坊」は旧金木町の出身だからである。その後、仁太坊門下の「嘉瀬の桃」*5や「白川軍八郎」*6らにより、津軽三味線の基礎が築かれていったのである。*7

坊様とは、目の見えない男の門付け芸人のことである。津軽ではホイドと言う差別語でも呼ばれ、物ごい乞食を意味するものであった。

津軽三味線の元祖「仁太坊」（秋元仁太郎）は、安政4年7月7日に生まれ、8歳のとき痘瘡がもとで失明し、3年目の11才の時に父をも亡くし、天涯孤独の境遇となった。「仁太郎は、数奇で苛酷な運命を背負いながらも一人で生きていかなければならなかった」のである。仁太郎にとって生き延びる道は、盲目の身で三味線を抱え、村から村へと門付けをするごぜ*8のように、坊様になることしかなかったのである*9。この想像を絶する境遇の中から、類いまれな民俗芸能である津軽三味線の始祖仁太坊が誕生したのである。仁太坊は金木の岩木川の橋の下の掘っ建て小屋で一生を送った。「俺は乞食ではない、芸人だ。」というのが彼の口癖だったとそうである。

二、太宰治

太宰治と津島修治は、明治42年（1909）年に県下有数の大地主である津島源右衛門（1871-1923）とタ子（たね）（1873-1942）の6男（11人の子供の10番目9として、仁太坊と同じ金木村に生まれた。父・源右衛門は木造村の豪農松木家からの婿養子で県会議員、衆議院議員、多額納税による貴族院議員等をつとめた地元の名士である。

津軽ジョンガラの生みの親である仁太坊が死んだ昭和3年、太宰治は19歳であった。太宰治が同じ村生まれの仁太坊に子供のころに出会ったことは想像に難くない。太宰治が子供のころ仁太坊は金木村周辺で門付けをしていたからである。その影響もあってと思われるが、弘前時代の太宰治は義太夫が好きである。

津軽三味線が繁栄したのは太宰治が生まれた金木村である。しかし太宰治は小説『津軽』において津軽三味線を語らない。

太宰治がタケと別れさせられた年頃に盲で生まれたために自三味線修行に出される子供がいることは幼い津島修治太宰治には大きな痛みとして描かれるはずである。しかし、津島ジョンガラは描かれないのであるその理由は彼のペンネームにあると考える。

太宰治の残した言葉の中に、「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つわれにあり」というのがある。300人の小作人をもつ名士の家の子としての恍惚とその立場は、所詮、お上から見れば奴隷の大将でしかないのである。このような地位がいつ消え去るのかという不安の表現である。*10

中国社会科学院経済研究所の馬家駒教授の言によると中国語で「太宰」とは「奴隷の大将」という意味だそうである。東京帝国大学文学部仏文学科*11の津島修治はその意味を知ったうえでペンネームを「太宰」としたのであろうと思われる。

小説『津軽』の中の最後のクライマックスである小泊への旅のシーンで太宰治は、次のように語っている。

「このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢つてみたいひとがゐた。私はその人を、自分の母だと思つてゐるのだ。三十年ちかくも逢はないでゐるのだが、私は、そのひとの顔を忘れない。私の一生は、その人に依つて確定されたといつていいかも知れない。」

幼いころ、母親代わりに育てて貰った奉公人の「たけ」の存在こそが、太宰の「恍惚と不安」を忘れさせる人であったのであろう。

同じ金木村に生まれた津軽ジョンガラ産みの親の「仁太坊」と直木賞作家の「太宰治」の生き方の差異こそが、『津軽の経済学』のテーマなのである。

「神は、持てる者の心を裁き、持たざる者の心を励ます」のであろうか。

*¹ http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16_kanko/syami/syamikaikan.html

*² 加瀬の奴踊りといわれ、田植えの踊りとして古くから伝えられている。新田開発に尽力した津軽藩士、鳴海伝右衛門を慰めるために唄い踊られたのがはじまりとされている。

*³ 金木のさなぶりといわれ、田植え後に行われる五穀豊穡・害虫駆除・町内安全を祈願する踊りである。

*⁴ 毎年旧8月1日に行われる「お山参詣」は、五穀豊穡と家内安全を岩木山の神に祈願する津軽の伝統的な行事である。

*⁵ 嘉瀬の桃（黒川桃太郎）は、仁太坊の芸に魅せられ24歳のとき弟子入りし、大正時代には、唄会の人気者でも「調子変わりのよされ節」が有名である。今日歌われる津軽の三つ物である、「よされ節」・「小原節」・「じょんから節」の型を作ったことで、津軽民謡中興の祖と呼ばれている。

*⁶ 仁太坊の最後の弟子である。9歳で弟子入りし、わずか3年で師匠を凌ぐ腕になったと言われている。仁太坊の「叩き三味線」、白川軍八郎の「弾き三味線」、自然界の音を三弦に昇華させた。津軽三味線の神様と呼ばれる木田林松栄や福士政勝に多大な影響を与えた。

*⁷ 大塚和雄氏著『津軽三味線物語 始祖仁太坊』

*⁸ 替女（ごぜ）とは、近世まではほぼ全国的におり、三味線や胡弓を弾き唄う、盲目の女性旅芸人。

*⁹ 12、3歳のころ上方から流れてきた女三味線弾きから手ほどきを受けたと伝えられている。

*¹⁰ 戦後、この不安は現実のものとなり、太宰治の入水自殺の原因の1つとなったのであろう。

*¹¹ 当時治安維持法で取り締まられていた共産主義活動にのめり込み、授業にはほとんど出なかったらしい。

博物館学芸員養成課程とリンクした大学博物館—札幌学院大学考古学資料展示室—

文学部教授 堂前 亮平

博物館学芸員養成課程と強くリンクした大学博物館として知られる札幌学院大学（北海道江別市）を訪ねた。

札幌学院大学博物館は、正式には考古学資料展示室（以下展示室）である。場所は大学正門に近い建物の1階にあり、展示室に隣接して博物館学芸員養成室と実習室が並んでいる。

展示室の特徴は、博物館学芸員養成課程と強くリンクしていることである。博物館の展示資料は、元人文学部長大場利夫教授が提供された考古学資料が基になっているということである。その後23年前に大場教授の後任となられた鶴丸俊明教授（人文学部人間科学科）に引き継がれ、展示資料も充実し現在に至っている。常設展示としては北海道の先史時代の石器や土器などの考古学資料であるが、ほかにはアイヌ関係の資料も展示されている。展示物は一部であり、多くは展示ケースの下の引出しや保管庫などに収納されている。

開館は火木金土の9時～4時であり、この対応の一部は非常勤職員が当たっている。入場者数をみると、年度によってばらつきがあるが、2001年度以降は2000人前後で推移している。2006年度～2008年度の開館日数は80日程度であり、1日あたりの平均入場者数は20人前後である。オープンキャンパスや高校生の大学見学のときに、展示室に立ち寄り人が多いようであるが、学内の学生や学外から一般の方の観覧もあるとのことである。

札幌学院大学の学芸員課程では、実習として館務実習と展

示実習がある。館務実習としては、ほとんどが北海道内の博物館、資料館などで実習を行っている。

特色は展示実習である。展示実習は学生自身によって企画から展示まで、学内の展示室で行うものである。学生を2つのグループに分け、それぞれがテーマを決める。2009年度は「Eating Poor～貧乏な貧困食」と「僕らが遊んだゲームたち～変化を遂げた家庭用ゲーム機～」というテーマで展示が行われた。これまで最も人気が高かったのは、「消しゴム展」をテーマにした展示ということだった。

2009年度の例で展示の流れをみると、①テーマ決定、②展示内容決定、③企画書作成、④学内アンケートの実施、⑤展示構成、⑥実働開始、⑦常設展示撤収・実習展示設置、⑧展示開催（10月22日～11月21日）、⑨常設展示復元、である。また多くの人に来てもらうために広報も重要であり、ポスターを作成するにも熱が入る。このように一連の作業を学生自身で行うことは、学外での実習では経験できないことである。

札幌学院大学の例でみるように、大学博物館は博物館学芸員養成課程のための施設というだけでなく、一般地域住民や高校生に向けての大学のアピールにもなる。さらに学内の学生に対しても地域文化を学習する場ともなっている。



博物館資料保存論対策講座受講レポート

文学部准教授 吉田 洋一

平成23年3月8日～10日の3日間、東京文化財研究所（独立行政法人国立文化財機構）にて開催された「『博物館資料保存論』対策講座」を受講しました。これは、平成24年度より、大学での博物館学芸員課程において「博物館に関する科目」が改正されることをふまえた対策講座です。改正されるにあたり新しく開講を義務づけられた科目の一つが「博物館資料保存論」です。趣旨説明を含め16時間以上に及ぶ長丁場でしたが、大変充実した対策講座でした。「資料保存」について考えるとき、まず思い浮かぶのは「害虫の駆除」のことですが、当然それだけではありません。室内環境に関しては、温湿度、照明、空気汚染など、屋外では日照、酸性雨、大気汚染、地下水などありとあらゆる劣化要因が存在します。また防災、防犯や、資料貸借時の梱包、輸送などに関しても懇切丁寧な講義が行われました。（同研究所ホームページ <http://www.tobunken.go.jp>）



▲東京文化財研究所

NEWSLETTER 2011 Vol.2



九州の図書館・博物館 ②

長崎歴史文化博物館

長崎歴史文化博物館主任研究員 平岡隆二



長崎歴史文化博物館

長崎歴史文化博物館は、「近世日本の海外交流史」をテーマとする博物館として、2005年11月3日に開館しました。江戸時代の長崎奉行所立山役所の復元建築と、現代的な博物館機能を兼ね備えた、世界的にもユニークな博物館です。長崎県と長崎市が共同で設置し、指定管理者制度に基づく運営を行っている点にも大きな特色があります。

展示室は、実物資料に基づいて長崎の歴史を紹介する「歴史文化展示ゾーン」と、復元した奉行所建築を見学しながらその役割・機能を紹介する「奉行所展示ゾーン」（場合により企画展も開催しています）、そして1,000平米の「企画展示室」の3つがあり、長崎の歴史・文化を幅広く発信するとともに、長崎観光の拠点としての役割も担っています。

歴史文化展示ゾーン
オランダとの交流コーナー

収蔵資料は、①長崎県立長崎図書館、②旧長崎市立博物館、③旧長崎県立美術館から移管された計48,000点からなり、近世日本の海外交流史に関する第一級の資料群として、すでに内外より高い評価を得ています。それらは館内に設置した3つの収蔵庫で、それぞれの資料の特性に応じた温湿度環境で保存・管理しています。



長崎奉行所関係資料

代表的な収蔵品として、国指定重要文化財3件（「長崎奉行所関係資料」1242点、「安政二年日蘭条約書」及付属文書、「泰西

王侯図屏風」）、国認定重要美術品3件（「南蛮人來朝之図屏風」、川原慶賀筆「唐蘭館絵巻」、同「瀉血手術図」）、長崎県指定有形文化財4件（「刀・対州住長幸」、「刀・肥前国忠吉」、川原慶賀筆「永島キク刀自絵像」、「青方文書」94点）などがあります。



泰西王侯図屏風



川原慶賀筆「唐蘭館絵巻」

収蔵品は、各旧蔵機関発行の冊子体目録のほか、当館ホームページ上の情報検索データベース (http://www.nmhc.jp/search_pref/top.index.html) からタイトル・作者名などで検索することができます。収蔵品の調査を希望される方は、1階の資料閲覧室（入場無料。閉館日以外はすべて開室。9:30-18:00）で随時閲覧することができます。資料の保存・取り扱いの関係上、事前申請が必要な資料もありますので（県立図書館旧蔵資料の一部、および旧市立博物館、旧県立美術館旧蔵分のすべて）、目的の資料が決まりましたら同室までお問い合わせください（代表電話095-818-8366）。同室は、長崎の歴史にまつわる研究書をほぼ網羅しており、それらも常時閲覧・コピーが可能です。学習・研究にまつわる相談も受け付けていますので、どうぞお気軽にお声かけください。江戸時代に日本と世界をつないだ町・長崎で、皆様をお待ちしております。

所在地：長崎県長崎市立山1-1-1

アクセス・入場料金・その他についてはホームページ：<http://www.nmhc.jp/>

久留米大学 比較文化研究所



第 1 回 医療文化講演会



カスバル・シャムベルゲル肖像（左）と
太田黒玄淡が受けた免許状（個人蔵）

「医療文化講演会」開催要領

- ◆目 時◆ 12月18日（土）16:40～18:30
- ◆場 所◆ 久留米大学御井キャンパス 500号館2階 52A教室
- ◆講 師◆ ヴォルフガング・ミヒェル先生（九州大学名誉教授）
- ◆演 目◆ 外科医カスバルと日本における西洋医学の受容について
- ◆司 会◆ 自見厚郎先生（久留米大学医学部看護学科）
- ◆参加費◆ 無料

ヴォルフガング・ミヒェル (Wolfgang MICHEL)

ドイツ・フランクフルト生まれ。主な研究分野は欧・日を中心とする東西文化交渉史、医史学、言語文化の比較研究。1974年来日。1984年、九州大学助教授。1995年、九州大学教授。2008年、同大学院言語文化研究院長。2009年、九州大学副学長。2010年4月、九州大学名誉教授。

1996年、日本医史学会学術奨励賞。2004年、ドイツ連邦共和国功労勲章。



久留米大学比較文化研究所 健康文化研究部会・地域博物館研究部会共催
問い合わせ：☎0942（43）4411（内線316：満園、内線466：吉田）

(5) 福祉コミュニティ研究部会

平成22年度は、以下の2つの研究・活動課題に取り組んだ。ここでは、その成果と課題について報告する。

研究・活動課題名

- I. 高良山および御井校区における地域交流実践に関する研究活動
- II. 新型特別養護老人ホームの現状と課題に関する研究活動

I. 高良山および御井校区における地域交流実践に関する研究活動

1. 目的

地元ボランティア団体（「高良山歴史観光ボランティアガイドの会」や「高良山の森と環境を守る会」など）と連携、協働するかたちで、若者からシニアまでの幅広い世代が交流できる機会を設けるとともに、高良山や御井校区の歴史や文化に触れ、地域に伝わる様々な伝統や文化遺産についての理解を深めることを通して、地域交流実践に関する研究活動を行う。

2. 研究委員

濱崎 裕子 久留米大学文学部社会福祉学科 教授（研究委員長）

保坂 恵美子

久留米大学比較文化研究所 客員教授（研究委員）

大西 良 久留米大学比較文化研究所 講師（研究委員）

小栗 正裕 久留米大学文学部社会福祉学科 講師（研究委員）

藤島 法仁 久留米大学比較文化研究所 研究員（研究委員）

ポドリヤク・ナタリヤ

久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）

許 莉分 久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）

3. 研究委員会開催日

平成22年 7 月12日（月）	第 1 回研究委員会	研究計画の検討
平成22年 9 月13日（月）	第 2 回研究委員会	研究スケジュール・手続きの検討
平成22年11月 8 日（月）	第 3 回研究委員会	研究報告①
平成22年12月13日（月）	第 4 回研究委員会	研究報告②
平成23年 1 月17日（月）	第 5 回研究委員会	研究報告③
平成23年 2 月 7 日（月）	第 6 回研究委員会	研究報告④
平成23年 2 月28日（月）	第 7 回研究委員会	研究報告⑤
平成23年 3 月14日（月）	第 8 回研究委員会	研究のまとめ

4. 活動報告

本研究活動によって、地域住民は高良山や御井校区に伝わる地域文化の伝承に関して、強い共感と期待を抱いていることが明らかとなった。また、今後の地域交流実践に関して、地域住民の意見や要望を広くとり入れることにより、地元根差した地域交流と文化創造が可能となり、ひいては地域アイデンティティを深化させたまちづくりにつながっていくことが示唆された。

Ⅱ. 新型特別養護老人ホームの現状と課題に関する研究活動（継続）

1. 目的

高齢者が、住み慣れた地域社会から切り離され、入所施設での集団生活を余儀なくさせる施設サービスについての見直しが盛んに進められている。そのような中、従来の特別養護老人ホームに代わって、小規模生活単位型と呼ばれる新型特別養護老人ホームが注目されている。そこで昨年に引き続いて、平成21年の4月から稼働している新型特別養護老人ホームの視察および施設職員へのインタビューを通じて、新型特別養護老人ホームの現状と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究委員

濱崎 裕子 久留米大学文学部社会福祉学科 教授（研究委員長）

保坂 恵美子 久留米大学比較文化研究所 客員教授（研究委員）

大西 良 久留米大学比較文化研究所 講師（研究委員）

小栗 正裕 久留米大学文学部社会福祉学科 講師（研究委員）

藤島 法仁 久留米大学比較文化研究所 研究員（研究委員）

ポドリヤク・ナタリヤ

久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）

許 莉分 久留米大学大学院比較文化研究科学生（研究委員）

3. 研究委員会開催日

平成22年5月17日（月） 第1回研究委員会 研究計画の検討

平成22年6月14日（月） 第2回研究委員会 研究スケジュール・手続きの検討

平成22年7月26日（月） 第3回研究委員会 事前勉強会

平成22年8月25日（月） 第4回研究委員会 事前勉強会

平成22年10月18日（月） 現地視察

平成22年11月1日（月） 第5回研究委員会 研究のまとめ

4. 活動報告

本研究の結果、従来の特別養護老人ホームではみられなかった、ユニット化による介護職員の負担感の増大や居室者の引きこもりの問題など、新型特別養護老人ホームにおける新たな課題を明らかにすることができた。今後、利用者の立場と施設職員の立場の双方向からの検討が必要であり、次年度

の研究課題としたい。

(文責 濱崎 裕子)

(6) 文化財保存科学研究部会

2010年度活動記録（主要項目のみ。部会員は敬称省略）

- 4月23日 徳島のすくも製作者新居修氏来学。宮中歌会始に「藍甕に浸して絞るわたの糸光にかざすとき匂ひ立つ」の歌が入選した松枝哲哉氏の祝賀会（研究部会主催）に新居氏も参加。
- 5月18日 本部で「筑後優品」の打ち合わせ。久留米大学のロゴ入り「筑後優品」の文字を知的財産本部が商標登録申請の予定。
- 27日 松枝哲哉氏工房藍生庵で、クララ染色実験の準備。後日、染色を実施。
- 6月14日 狩野、医学部外科学講座小児外科部門八木実教授を訪問、クララ参考文献についてのご教示を依頼。後日、参考文献を提供していただいた。
- 24日 上宮、ザウテルシバンムシの防虫効果テスト準備、和紙豆本の作成。
- 26日 文化財研究部会研究会で、狩野・上宮・松枝哲哉氏・近藤早苗氏が話題提供。八木教授のご紹介により参加したツムラ社員がクララの追加関連資料を持参された。
- 7月31日 文化財研究部会研究会（展示準備）。
- 8月6日 六つ門サテライトキャンパス・オープニング、高等教育コンソーシアムの『「筑後優品」誕生物語 序章』展示開始（12日まで）。(*ポスター参照)
- 28日 文化財研究部会研究会。
- 10月4日 上宮、BG 液にて自然（非加熱）抽出クララエキス抽出開始。
- 6日 松枝哲哉氏作「遥光」日本伝統文化工芸展会長賞受賞祝賀会。
- 21日 文化財研究部会研究会。
- 24日 源太窯と藍生庵の見学。
- 11月5日 上宮、八女市宮野公園植栽用としてクララ苗150本余を提供。
- 22日 研究会で和紙と久留米緋のビデオ編集。
- 28日 中野三敏先生文化功労章受章祝賀会。
- 12月6・7日 中華人民共和国甘肅省博物館で開催された第4回東アジア紙文化財保存修理シンポジウムに、狩野啓子・松枝哲哉(研究協力者)・溝田俊和(研究協力者)の3名が参加。
- 6日 上宮、クララエキスにアロエベラを加え、保湿液（BG：ブタンジオール）50%精製水中で抽出開始。
- 1月22日 狩野、八女伝統工芸館で『和紙大鑑』調査。
- 28日 農商工テクノブリッジ2010(平成22年度知財先進都市支援事業)で「防虫クララ和紙」発表(狩野)。(＊ポスター参照)
- 2月5日 狩野と溝田俊和氏、大川に手漉き和紙伝統製法実験用の銀杏板を見に行く。
- 28日 八女市 JA 女性リーダー研修「八女市中山間地域における耕作放棄地対策と新規作目の研

究に対する研修会」に狩野・上宮が招聘され、「クララの薬効」を話す。

3月14日 狩野、パリで修復専門家マリ・クリスティン氏夫妻と面会。

15日 狩野、ロンドンで大英博物館の修復専門家杉山恵助氏と面会。

31日 中野三敏文化講演会「和本リテラシーって何？」（高等教育コンソーシアム）主催。（*ポスター参照）

今年度も、九州国立博物館が進めている IPM 普及活動に研究部会として協力した。

上宮は、2009～2012 農林水産省領域特定型研究「チャの新害虫ミカントゲコナジラムの発生密度に対応した戦略的防除技術体系の確立」（設定型受託研究）に引き続き参加した。

(文責 狩野 啓子)

久留米大学比較文化研究所

文化財保存科学研究部会 展示会のご案内

「筑後優品」誕生物語 序章

I 前史

II 「文化財保存科学研究部会」の取り組み

III さまざまな共同研究

IV 「筑後優品」の誕生

期間中、演習、学習会や
ギャラリー・トークを行います。

筑後優品

久留米大学

開催場所
くろめあ六ツ門6F 高等教育コンソーシアム
久留米サテライト・キャンパス 展示室
〒830-0031 福岡県久留米市六ツ門町3-11
最寄バス停「六ツ門」

開催期間
2010年8月6日(金)～8月12日(木)
午前10時～午後5時
※都合により変更することがあります。

主催：久留米大学比較文化研究所文化財保存科学研究部会
協賛：高等教育コンソーシアム久留米・久留米大学非公認サークル 筑後伝統文化愛好会(ccc)

お問い合わせ
久留米大学文学部 幹野哥子 E-Mail: kano_koko@kurum-u.ac.jp

久留米大学
Kurume University

[illegible]

中野三敏文化講演会

やほこうーあいとろくろをそまておいて、
後のことをなげかけろ
ア
百万冊の和本が待っている
トミ

昔取った杵柄のあなたへ

『和 본 リテラシー』

高校生はくずし字にチャレンジ

小学生でも和本是読める

中学生がドキドキハラハラする和本

何ぞ？



中野 三敏(なかの みづみ) 日本文学研究家。
江戸心伝、明治文壇の第一人者。大正時代を代表。
生涯で「源氏物語」(9巻全訳)、角田喜久雄「サントリー」(学生版)、「花ざかりどもの繪巻本」(児童書)
戦後三回出版された、「和本文学」(国語教材)、「和本文入門くずし字で」(大人一冊を要しむ)(小学館出版)など、平成22年まで文化功労者。

平成23年
3月31日(木)

開場/午後2時30分	開演/午後3時~午後5時
会場/高野教育コンソーシアム久留米	入場料/無料
定員/先着順 100名	

※当日の都合により変更となる場合がございます。
お問い合わせ先/久留米大学文化財保存部 資料課 〒8-16-1 Kure University, Kure City, Hiroshima 737-8501 Japan
E-Mail:kureto_kokuhon@kure-u.ac.jp

主催：久留米大学比較文化研究所 文化財保存科学研究部会

久留米大学

(7) 民事法研究部会

民事法研究部門（民事法研究会）の活動実績は以下のとおりである。

①2010年 9 月 9 日

報告者：在澤英俊氏（本学法学部）

テーマ：振込取引の法的構造に関する一考察——近年の判例の検証を踏まえて——

（法学会と共催）

②2011年 2 月15日

報告者：西原慎治氏（神戸学院大学法学部）

テーマ：リスク移転型契約を巡る立法論的考察——民法（債権法）改正を契機として——

③2011 年 3 月10日

報告者：龔敏氏（本学法学部）

テーマ：イギリスにおける「みなし解雇」

（法学会と共催）

（文責 石川 真人）

(8) 地域社会・文化・経済研究部会

平成22年度の地域社会経済研究専門部会の活動報告として、1. 久留米大学学外公開講座（御井学舎とコンソーシアムくるめりあ）での講座を主催したこと。また、青森県の青森中央学院大学や海外（台湾）の大学（呉鳳科技大学）での講演や国内での講演会を実施したことについて報告することができる。

1. 公開講座

(1) 久留米大学公開講座「久留米学・筑後学」と題して、平成22年 6 月10日から 7 月 1 日までの毎週火曜日14：00-15：30 に、久留米市六つ門のコンソーシアムくるめりあ 6 階会場において、地元の郷土史家を招いて、下記の要領で開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
久留米の古代	大矢野 栄次	経済学部教授	6 月10日	コンソーシアム くるめりあ 久留米市六つ門 14：00-15：30
邪馬台国の卑弥呼の 居た処	広木 順作	郷土史家	6 月17日	
邪馬台国と筑後弁	福島 雅彦	古代史研究家	6 月24日	
久留米の現代と未来	大矢野 栄次	経済学部教授	7 月 1 日	

(2) 久留米大学御井学舎500号館 51A 教室において、平成22年 7 月 3 日から 7 月24日までの毎週火曜日15：00-16：30に、高名な古田武彦先生とその門下の先生方を招聘して、久留米大学公開講座「古代史講座 2010」を開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
神護石の資料批判	古田 武彦	古代史研究家	7 月 3 日	久留米大学 51A 15：00-16：30
古事記・日本書紀と九州王朝	大矢野 栄次	経済学部教授	7 月10日	
かくや姫と邪馬台国	室伏 志畔	古代史研究家	7 月17日	
和歌が解き明かす古代史	福永 晋三	古代史研究家	7 月24日	

(3) 久留米市六つ門のコンソーシアムくるめりあ 6 階会場において、元 JR 九州社長・会長の石井幸孝氏を招聘して、9 月30日から10月28日までの毎週木曜日に久留米大学公開講座「鉄道学講座－鉄道戦略学」と題して下記の内容について公開講座を開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
日本交通史概論	石井 幸孝	元 JR 九州 社長・会長	9 月30日(日)	コンソーシアム くるめりあ 久留米市六ッ門 19：00-20：30
新幹線の歴史と課題			10月 7 日(日)	
新幹線夜間物流新時代			10月14日(日)	
九州新幹線の未来			10月21日(日)	
鉄道と日本経済	大矢野 栄次	経済学部教授	10月28日(日)	

(4) 大川市ふれあいの家において、11月 4 日から11月25日までの毎週木曜日に「大川学」と題して下記の内容について公開講座を開催した。

演 題	講演者氏名	所 属	開講日	会 場
大川の歴史	大矢野 栄次	経済学部教授	11月 4 日	大川市 ふれあいの家 18：30-20：00
大川の歴史と未来	大矢野 栄次	経済学部教授	11月11日	
大川の未来	石井 幸孝	元 JR 九州 社長・会長	11月18日	
大緩和の生活文化と民話	川野 恵美子	大川市議	11月25日	

2. 公開講座

国内の講演会としては、12月4日に青森県の青森中央学院大学地域マネジメント研究所において、「地域の歴史・文化を活用した観光振興」という題目で講演を行なった。また、久留米市内の耳納市民センターと荒木市民センターにおいて、4月18日と5月16日に「九州王朝の歴史と壬申の乱」と題して講演会を開催した。また、11月15日と12月13日に、耳納市民センターと荒木市民センターにおいて、「日本経済と世界」についての講演会を開催した。

3. 新幹線物流研究会

本研究会からはスタートした「新幹線物流の研究会」が東京での研究会と福岡県と佐賀県、大阪府、宮城県等で研究会として拡大・進展している。研究会の今後の発展が期待されている。

この新幹線物流研究会の成果をまとめた『新幹線列島大動脈の夜間物流への活用』は、2011年12月に、『eco japan cup 2011』（主催：環境省、国土交通省、総務省、一般社団法人環境ビジネスウィメン、株式会社日本政策投資銀行、株式会社三井住友銀行）において報告し、優秀賞を受賞した。

本賞は、“エコ復興”をスローガンに毎年開催されている“エコビジネスの芽を見つけ、育てるコンテスト”「eco japan cup 2011」である。

《メッセージ》

歴史は古代より私たちの生活や社会・政治、経済の鏡¹⁾とされて来た。歴史を見ることで自分や自分たちの周囲や地域、そして、日本が見えるのである。これまで、われわれ日本人が何をしてきたのか、これから、私たちが何をすべきなのかが、日本の歴史という鏡を見ることから見えて来ると考えるのである。

邪馬台国が「近畿にあったに違いない」とする研究者や「九州にあったにちがいない」とする研究者にとって、日本の古代史は自己主張の1つの道具かもしれない。しかし、歴史研究によって齎されるものは、歴史の真実を知ろうとする努力から得られる知恵である。それは、「あり得ないことが生じうること：ブラック・スワン」、「歴史の本質は変化すること」を理解することが重要であるということである。「世の中が思いもかけない方向に変化すること」、そして、やがて、「世界の中心が移動すること」を理解することであり、「不変と思われた常識が変質する」ということが理解されなければならないのである。

【注】

¹⁾ 白銅や青銅で作り、表面をよく磨いて姿を映すもの。「影見」の意であろうとされる。鏡は古くは極めて神秘的なものとされ、宝器として神事に用いた。（白川静緒「字訓」）

（文責 大矢野 栄次）

(9) 地域精神保健福祉部会

辻丸秀策「遺言者死亡後に行われた意思能力をめぐる精神鑑定—遺言無効確認請求控訴事件—」『久留米大学比較文化年報 第20輯 2011』

大西良「アンガーマネジメントプログラムの実践に関する考察～中学校での事例を中心に～」『福岡県社会福祉士会研究誌 第4号 2010』

大西良「不登校事例におけるソーシャルワークの実践～エコマップを用いた役割評価を中心に～」『学校ソーシャルワーク研究 第5号 2010』

大西良・藤島法仁・ポドリヤク ナタリヤ・許 莉芬・末永和也・米川和雄・辻丸秀策「精神保健福祉士のスクールソーシャルワーク業務に関する検討」『久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 第18巻 2010』

大西良「不登校生徒へのソーシャルワーク的介入に関する研究」『比較文化研究第44輯 2010』

大西良・辻丸秀策「精神保健福祉士の相談記録の書き方」『こころの科学 第153号 2010』

米川和雄編著 大西良分担執筆「スクールソーシャルワーク実習・演習テキスト 第2章エコロジカルパースペクティブ～スクールソーシャルワークの人と環境の交互作用 第3章学校環境のアセスメント～包括的アセスメントを活かした視点～」『北大路書房 2010』

大西良・占部尊士「中学生へのアンガーマネジメントプログラムの実施と効果検証」『日本福祉心理学会 第8回大会 2010（口頭発表）』

占部尊士・大西良「実習感情における要素分析に関する研究～実習施設ごとの実施前後を比較して～」『日本福祉心理学会 第8回大会 2010（口頭発表）』

大西良・藤島法仁・末永和也・占部尊士「不登校事例におけるスクールソーシャルワーカーの専門的機能と役割に関する研究」『日本社会福祉学会九州部会 第51回研究大会 2010（口頭発表）』

占部尊士・大西良・藤島法仁・村岡則子「介護福祉実習の指導方法についての一考察～従来の実習カリキュラムにおける実態調査から～」『日本社会福祉学会九州部会 第51回研究大会 2010（口頭発表）』

藤島法仁・大西良・保坂恵美子「支え合う関係の形成に果たす民生委員の役割～鹿児島県 A 市 B 町を事例に～」『日本地域福祉学会 第24回大会 2010（口頭発表）』

ポドリヤク ナタリヤ・島崎昇平「ウクライナにおける障害をもつ子どもへのインクルージョン」『日本比較文化研究 第91号 2010』

ポドリヤク ナタリヤ・島崎昇平「学習教育と福祉体験を組み合わせた交流教育の効果～交流教育のフィールドワークを通して～」『日本比較文化研究 第94号 2010』

ポドリヤク ナタリヤ・辻丸秀策・島崎昇平・白石央「児童の思いやり意識育成のための障害理解学習の意義について」『日本比較文化研究 第95号 2011』

ポドリヤク ナタリヤ「ウクライナにおけるポスト・チェルノブイリ時代の環境と国民健康問題について」『環境福祉学会 2010 (口頭発表)』

末永和也「介護予防における概念の変遷」『九州社会福祉研究 第35号 2010』

末永和也「特定高齢者におけるサービスの展開に関する一考察」『九州社会福祉学 第7号 2011』

末永和也・占部尊士「介護支援専門員のコーピングに関する研究」『久留米大学大学院比較文化研究論集 第27号 2011』

末永和也「特定高齢者施策における介護予防事業のサービスに関する研究—インタビュー調査からの分析」『日本社会福祉学会九州部会 第51回研究大会 2010 (口頭発表)』

末永和也・占部尊士「介護支援専門員のストレスとコーピングの実態に関する研究—属性や職場環境からの分析」『日本社会福祉学会九州部会 第52回研究大会 2011 (口頭発表)』

Arakawa Y, Yoshida H「On the Anxiety for School Life—From the Analysis of a Questionnaire Survey towards University Students—」『Kawasaki Journal of Medical Welfare, 15(2) 2010』

米川和雄・辻丸秀策・荒川裕美子他「Emotional Intelligence Scale(EQS)の併存的妥当性の検証」『比較文化研究45輯 2010』

森永佳江・米川和雄・荒川裕美子「社会的起業における福祉の新しい形、The Big Issue に関する海外の研究の動向」『久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編, 第10・11号合併号 2011』

米川和雄・辻丸秀策・大原朋子・荒川裕美子「情動知能(EQ)と職場サポートによる職務遂行因子への影響」『久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編, 第10・11号合併号 2011』

荒川裕美子・吉田浩子「大学生の対人的疎外感と昼食行動」『川崎医療福祉学会誌, 21(1) 2011』

Yumiko Arakawa, Hiroko Yoshida「On the value system on 'support' -from the analysis of questionnaire survey towards the Japanese university students-」『2010 Joint World Conference on Social Work and Social Development The Agenda 2010 (口頭発表)』

荒川裕美子・吉田浩子「福祉系大学新入生の援助授与および要請行動に対する意欲の程度とそれに影響を与える諸要因の関連」『第58回 日本社会福祉学会 2010 (口頭発表)』

米川和雄・大原朋子・荒川裕美子・大西良・染谷涼子「スクールソーシャルワーカーにおける教職員メンタルヘルス支援の実践～スクールソーシャルワーク教育課程におけるメンタルヘルス支援の学習の提案～」『第10回 精神保健福祉士学会学術集会 2011 (口頭発表)』

荒川裕美子・吉田浩子「大学生の相互支援に対する意欲とそれに影響を与える諸要因の解明—対人支援専門職養成大学における初年次教育を考える手がかりとして—」『第59回 日本社会福祉学会 2011 (口頭発表)』

(文責 辻丸 秀策)

2. 筑後川流域圏の総合研究（久留米市）

1) 「筑後川流域圏の総合研究」

「筑後川流域圏の総合研究」は 2006 年度から開始した。最初（2006 年度・2007 年度）の研究対象地域は「大川」地域とし、2008 年度・2009 年度は「三潴（旧三潴地域である大木町、三潴町、城島町）」地域の研究を行った。これらの地域研究の成果は報告書として『大川地域研究』、『三潴地域研究』を刊行している。

2010 年度と 2011 年度の研究対象地域は「久留米市」であり、2 年間に亘って研究を行い 2011 年度末に研究成果の報告書を刊行する予定である。

2) 「久留米市地域研究」

2010 年度のプロジェクトメンバーと研究テーマ

堂前亮平	久留米市合川町の都市化
浅見良露	筑後川流域圏における地域づくりに対する久留米大学の役割
駄田井正	久留米市農業の自然共生度について
河内俊英	筑後川の水質と川環境
宮原信孝	校区コミュニティ再編とまちづくり
谷口 豊	久留米市酒造業の現段階
畠中昌教	久留米市の酒と観光
大矢野栄次	久留米の伝統文化と観光資源
吉田洋一	久留米市域の古文書調査（未調査分）
大西 良	久留米市御井町におけるコミュニティ意識に関する研究

（文責 堂前 亮平）

3. 社会連携研究「健康生きがいのあるまちづくり」

第 4 回 健康生きがいのあるまちづくり “ゆにばひろば”

『おこそう！御井ルネッサンス』

筑後川水系と広い平野に恵まれた筑後川流域圏は、かつては豊かな穀倉地帯として流域住民の暮らしの基盤となっており、そこには三世同居家族と密度の濃い近隣ネットに支えられた農村地帯が広がっていた。ところが、戦後の産業化・都市化に伴う都市型核家族の増加や農村家族の兼業化・離農・脱農などによって、流域住民の子育てや高齢者介護等が困難化し、近所づきあいの希薄化なども促進されている。筑後川流域圏のこのような現状を踏まえ、家族や地域の絆を見直し、親から子、子から孫への地域文化の語り継ぎと地域社会の世代間交流の促進等が重要課題となっている。

そこで事業 4 年目を迎える本年度は、前年度までの成果（地域アイデンティティ形成のコアができたこと）を踏まえ、地域の歴史と文化の総論的見直しという視点から、「おこそう！御井ルネッサンス」というテーマを掲げた。イベント開催日時は、平成 22 年 7 月 4 日（日）午前 10 時から午後 4 時までで、開催場所は久留米大学御井キャンパス 500 号館および御井学館 3 階の大ホールであった。開催当日の午前中に行われた「まちづくりシンポジウム～家族の絆・地域の絆～」では、高良大社の竹間宗麿氏、元久留米市立南筑高等学校校長の黒岩寿臣氏、久留米大学学長の薬師寺道明氏、久留米大学比較文化研究所所長の浅見良露氏によるシンポジウム形式の講演会が開かれ、大学と地域の連携、大学の様々な資源を活用したまちづくりなどについて活発な意見交換が行われた。また、午後からは地元御井町にある幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校、大学の子どもから学生までが参加するパレード「みいパレード」を行い、小さな子ども、小中学生、高校生、大学生、シニア、ボランティアなどの多様な立場の人々がつながる、絆づくりの機会となった。さらに、子ども遊び広場では、学生や地域ボランティア、シニアが中心となって、プールボールや紙飛行機、風船アート、お手玉、剣玉、竹とんぼづくりなどを行い、子ども、大人をいわず、遊び広場に参加した者たちは童心に帰って遊びを満喫し、心に豊かさを取り戻していた。

なお、以下に、第 4 回健康生きがいのあるまちづくりの主催・共催・後援団体の一覧とイベントで使用したポスターを示す。

第 4 回 健康生きがいのあるまちづくりの主催・共催・後援団体

事業名称	第 4 回健康生きがいのあるまちづくり（ゆにばひろば） —おこそう！御井ルネッサンス—
主 催	久留米大学比較文化研究所
共 催	久留米大学文学部社会福祉学科
後 援	久留米市、久留米市社会福祉協議会、久留米市生きがい健康づくり財団、高良大社、久留米市御井校区まちづくり振興会、久留米市消費者連絡協議会、久留米市子ども会連合会、NPO 法人子育て支援ボランティアくるるん、久留米大学文学部・経済学部・法学部・商学部、久留米大学 KOS、久留米大学 K-Vec、久留米大学 BBS、西日本新聞社、くーみんテレビ

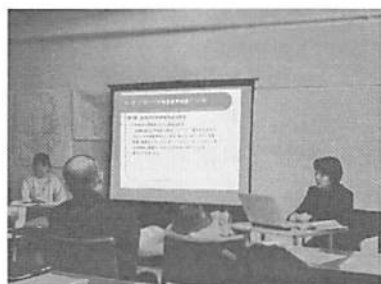


(文責 保坂 恵美子)

4. 比較文化研究所 研究員 発表会

1) はじめに

2006年度よりスタートした当発表会は、本年度で第5回目の実施となりました。本年度は25名の研究員が当研究所に所属しており、当発表会ではその内の15名が発表を行いました。研究員諸氏は、久留米大学大学院（比較文化研究科 後期博士課程）を終え、仕事をされながら研究員として活動している方が多いことから、どうしても当日の発表を行うことができない方が出てきます。しかし、そのような事情の方も本年度に実施した研究成果を予稿集に掲載することで報告しています。予稿集は、比較文化研究所の会議室に残部をおいていますので、ご興味のある方は、ぜひ手に取っていただければと思います。本年度からは1つの会場（比較文化研究所会議室）で開催しました。平成23年2月14日（月）という平日にもかかわらず、担当教員の先生方をはじめ、各領域の院生といった多くの方々に参加していただきました。また、各会場での質疑応答も活発に行われ、内容のある発表会となりました。



2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日 時：平成23年2月14日（月） 10：00～16：30

②会 場：久留米大学（100号館3棟2F：比較文化研究所会議室）

③タイムスケジュール

- | | |
|-----------------|-------------------|
| (1) 9：30～9：50 | 受 付 |
| (2) 9：50～10：10 | 開会挨拶（比較文化研究所 会議室） |
| (3) 10：00～12：10 | 研究発表6演題 |
| (4) 12：10～13：00 | 昼 食 |
| (5) 13：00～16：20 | 研究発表9演題 |
| (6) 16：20～16：30 | 閉会挨拶（比較文化研究所 会議室） |

④発表形態

1人20分（口頭発表15分 質疑5分）

2～3演題毎に座長を交代する（1座長：1時間程度で時間調整）

演者の他に、座長、時間係、ベル係を置く（座長、時間係、ベル係は、研究員で行う）

3) 発表演題一覧

平成22年度 比較文化研究所 研究員研究発表会
演題一覧

会場 (100号館 3 棟 2F 比較文化研究所 会議室)					
No.	役割	発表者	演 題	時 間	指導教員
グループ①	1	③座長 高木 恵	律令期における国分寺塔の可視領域 — 西海道 8ヶ国の比較 —	10:00～10:20	堂前 亮平
	2	③ベル 篠倉 大樹	広島県上蒲刈島における安芸灘大橋の架橋効果	10:20～10:40	堂前 亮平
	3	方 大年	中国・長春市における土地制度の転換による都市 内部構造の変貌	10:40～11:00	堂前 亮平
グループ②	4	①座長 胡 薇	中国信用担保体系の法整備に関する一考察	11:10～11:30	宗岡 嗣郎
	5	①ベル 浦川 康弘	IT 革命と流通の変化	11:30～11:50	駄田井 正
	6	阿 思根	交通渋滞を徹底的に解決するための文化経済学	11:50～12:10	駄田井 正
昼休み					
グループ③	7	②座長 藤島 法仁	在宅一人暮らし高齢者の自立生活支援に関する研究 —自治会を中心とした北九州市緑ヶ丘第4マンション の取り組みを事例に	13:00～13:20	保坂恵美子
	8	②ベル 東 巧	アンケート調査における適当な回答のチェックに ついて	13:20～13:40	木藤 恒夫
	9	赤須 大典	集団表象と自己表象の一致性と集団同一視との関係	13:40～14:00	木藤 恒夫
グループ④	10	⑤座長 羽山 順子	縦断的観察による新生児から6ヶ月までの睡眠発達と 母親の養育行動	14:10～14:30	津田 彰
	11	⑤ベル 金 ウイ淵	本邦におけるストレスマネジメント研究の最近動向	14:30～14:50	津田 彰
	12	橋口 公子	『平家物語』における「心ぼそし」	14:50～15:10	崎村 弘文
グループ⑤	13	④座長 何 啓華	日本の国語掛図と台湾の国語掛図の比較	15:20～15:40	崎村 弘文
	14	④ベル 幣旗佐江子	文学と冥婚・幽霊婚 —『怪談牡丹燈籠』お露像を求めて—	15:40～16:00	崎村 弘文
	15	陳 宥蓉	台湾の化学物質管理制度に関する考察	16:00～16:20	藤田 八暉

(文責：大西 良)

5. 日誌 (2010年度)

2010年 (平成22年)

4 月13日 (火) 比較文化研究所運営会議

4 月21日 (水) 比較文化研究所会議

7 月 4 日 (日) 「第 3 回 健康生きがいのあるまちづくりフェスタ～つなごう！ふるさとの文化～」

7 月21日 (水) 比較文化研究所運営会議

7 月28日 (水) 比較文化研究所会議

9 月15日 (水) 比較文化研究所運営会議

10月20日 (水) 比較文化研究所運営会議

12月 1 日 (水) 比較文化研究所運営会議

12月 8 日 (水) 比較文化研究所会議

2011年 (平成23年)

1 月 5 日 (水) 比較文化研究所運営会議

1 月19日 (水) 比較文化研究所会議

1 月27日 (木) 比較文化研究所協議会

2 月14日 (月) 比較文化研究所研究員研究発表会

3 月10日 (木) 比較文化研究所運営会議

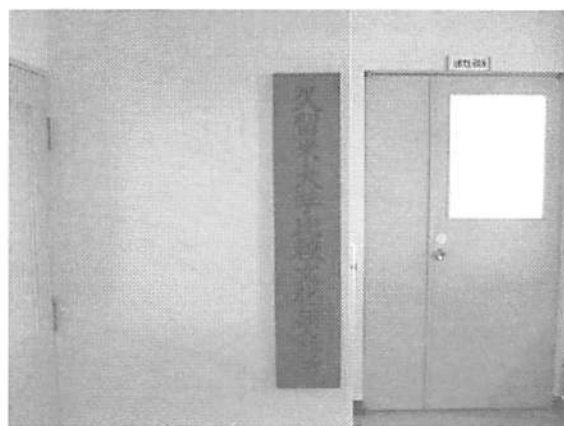
※部会活動を除く

施設・設備

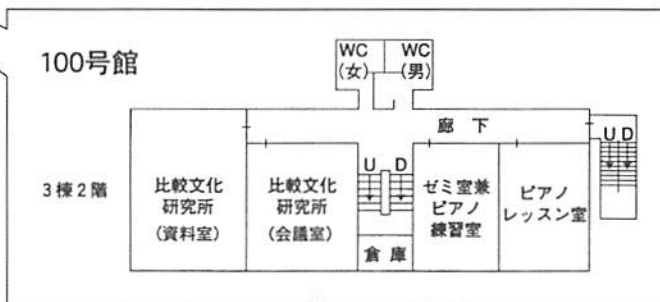
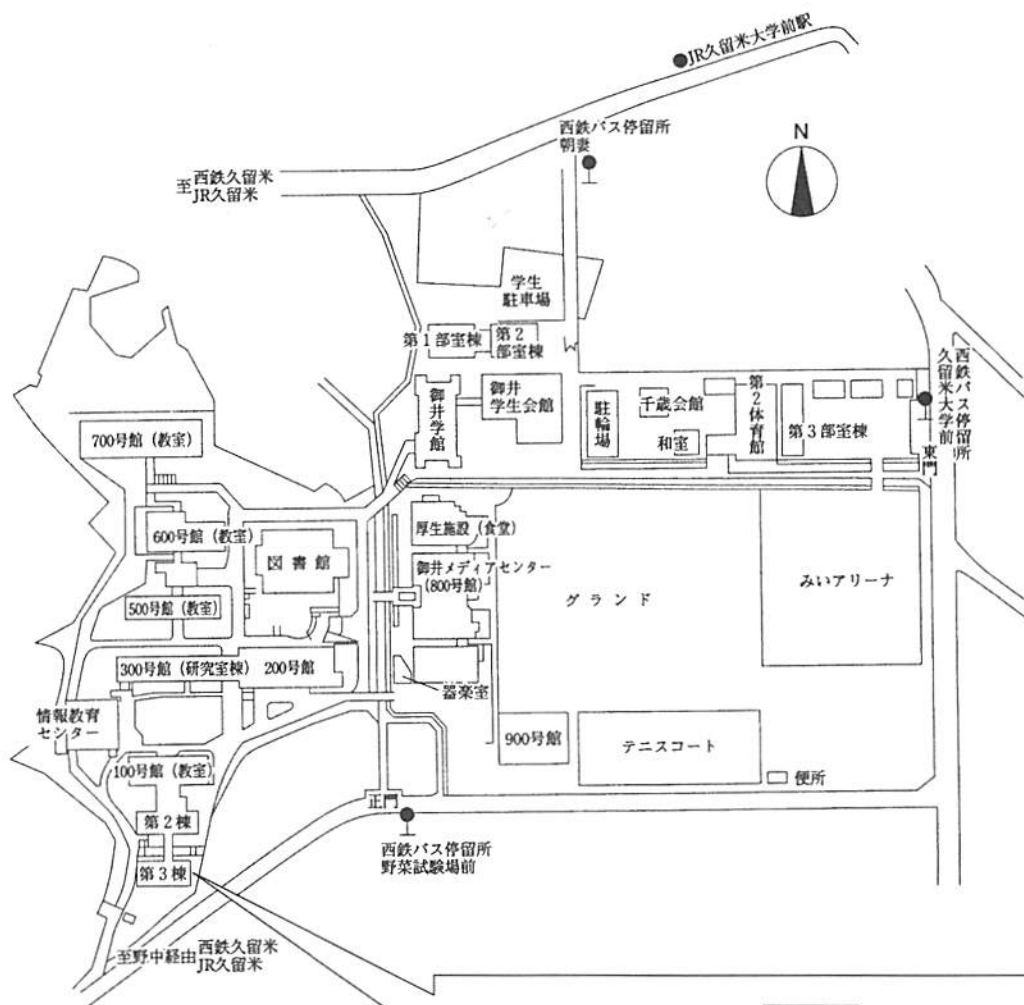
比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2006年に100号館の現在の位置に移動しています。研究所の部屋は2部屋あり、1部屋は会議・研究会に使用、他の1部屋は資料室および作業室として使用しています。なお、専任所員の研究室は、300号館にあります。

研究所の資料室には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する膨大な図書が保管されています。これは、元サガテレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。現在、図書の整理を進めているところであり、この方面の研究の発展に寄与するものと期待されます。

また、これらのほか、100号館1棟1階に、社会連携研究のための作業室や、文化財保存科学研究部会の実験室があります。



久留米大学（御井学舎）比較文化研究所 案内図



久留米大学 比較文化研究所年報 第4号

著作権所有

不 許 複 製
禁 転 載

平成24年3月14日 印 刷 第4号
平成24年3月18日 発 行

編 集 兼 久留米大学比較文化研究所
発 行 者 〒839-8502 久留米市御井町1635

印 刷 所 もろふじ印刷
〒830-0074 久留米市大善寺町夜明1116